

# 石クリ通信

## 6月号

母のこと

院長 石川 悟

母は大正9年生まれ。名前は秋子ですが、叔父や伯母は「ひろ子」と呼んでいました。家族も親戚も、本名がひろ子だと思っていたようです。なぜこのようなことになったか。母は十人兄弟の七番目、四女でした。生まれた時ひろ子と名付けられたのに、父親（祖父）が役所に届出する時に名前を忘れ、秋に生まれたから秋子でいいだろう、と書類を書いてしまったとのこと。後でこの事実が発覚しました。

実家が事業をやっていたことなどもあり、女学校を卒業した後、新宿の文化服装学院で洋裁を学びました。後に高田賢三やコシノジュンコを輩出する学校で青春を謳歌し、この頃が人生で一番輝かしい時だったのかもしれない。本人は洋裁で自立する夢を持っていましたが、日本は太平洋戦争に突入、父親の決めた縁談で農家に嫁ぎ、慣れない百姓仕事で苦勞しました。夜はよくミシンを踏んでいました。背広など洋服はもろろ帽子や手袋まで作っていました（写真は筆者が4歳ごろ。母が作ったズボンと帽子）。



我々4人兄妹も体が丈夫な方ではなかった。子育てでも苦勞があったようです。また父は十人兄弟の長男だったため、正月やお盆には親戚が我が家に集まり、ほとんど民宿のようになっていたので、布団の準備、食事の世話などで大変そうでした。

子供の頃、母から勉強しろ、と言われたことはありませんでした。人に迷惑をかけなければ、好きなこととしてよい、勉強したければお金を出すけれど、私立の学校はだめ、と言われ、まあそんなものだろうと思つて自主的に勉強をしていました。筆者の大学時代六年間は下宿に訪れることもなく、所属していたオーケストラの演奏会にも一度も来ませんでした。しかし毎月仕送りの際の手紙はびっしりと近況や励ましを書かれており、いい加減なことではできない、といつも気を引き締めていたのを思い出します。亡くなる数カ月前まで子供や孫、介護のスタッフ宛てに手紙を書いていました。認知症になることもなく、二日前には気の合う介護の人に、そろそろ迎えが来たようだからお世話になりました、と声をかけていたそうです。コロナ禍で寂しい見送りになつてしまいました。今頃は父や伯父となつかしい再会をしていることでしょう。

### 大型連休

事務 田所 弓佳

今年の5月の大型連休はコロナウイルスの影響もあり旅行には行かずに家でゆっくり過ごしていました。その中で私なりにたくさんチャレンジしていたことは料理です。基本的には凝った料理やアレンジ料理は作れないので簡単にできる物を本や動画を見て作ることが多かった。少しの間だけでしたが毎日献立を考えたりする大変さを知り、親のありがたみをすごく感じました。今回の連休中に少しでも料理の腕が上がったことを祈ります（笑）

### やまぼうし

事務 森 多加子

新緑の季節となり、我が家のやまぼうしの木もたくさん花が咲き始めました。やまぼうしは花が咲き終わるとさくらんぼほどのオレンジ色の実をつけます。表面はボコボコしていて、お世辞にも美味しそうとは言えない実です。ですから食べる実だとは思えず、毎年たくさん実を捨てていました。ところが昨年、やまぼうしの実がマンゴーのような味でとても美味しいと植木屋さんに教えてもらいました。なんでもつたないことをしていたのか！もつと早く教えてくれていたら、今年は是非、やまぼうしジャムを作ってみようと思います。

### 私のステイホーム

看護師 澤田 彰子

今年の5月の連休はステイホームという事で一人暮らしをしている母の所で過ごしました。長年独りで好き勝手に生活していたので私とペースが合わず衝突しながらでしたが家の中の片付けをして、丁度母の誕生日だったので誕生日祝いとして、ゆっくりお話をたくさんできました。普段忙しくて長く滞在する事がなかったので、コロナ自粛のお陰で母との有意義な時間が過ごせました。

### ロドトルラ

看護師 太田 小百合

お風呂やトイレ、キッチンなどのピンク汚れて、何故か一瞬にして広がりますよね。普段はあまり気にならないかったのですが、ある時「これって体に悪くないのかな？」（発生させなくする方法はないのかな？）と思い、調べてみました。ピンクの汚れはカビではなく、ロドトルラという酵母菌でした。人体への影響は少ないようですが、カビよりも繁殖スピードが早く、石鹸カスが栄養源で、水さえあればむちゃくちゃ繁殖して繁殖するみたいです。「ロドトルラ」なんて一見怪獣みたいな名前前の菌ですが、人体への影響は少ないということで安心です。洗浄方法は何種類かあるようですので、調べてみて下さい。

### 起き上がり小法師

看護助手 柴田 さち子

約四百年前につくられたと言われ、会津の民芸品の中でも最も古いもので、転んでも転んでも起き上がります（七転び八起き）。身体は小さいけれど健康・忍耐を表し、いつも元気で働けるように、また家族や財産が増えるように、との願いが込められた縁起の良い民芸品です。



### ご報告

事務長 石川 都

風薫る五月の、庭の白ツツジが満開の七日に、母石川秋子が永眠しました。今年十月で百歳になる目前の九十九歳の生涯でした。夫を六年前に送った後も、一年ほどは自宅で頑張りましたが、私達も一日クリニクで不在のため、一人暮らしも次第に難しくなり、短期間のしおさい滞在を経て、五年ほど前に小咲園に入居しました。小咲園は母が幼少期を過ごした小咲山にあり、現理事長も甥という恵まれた縁で、部屋には親代わり慕った兄山本哲蔵氏の写真を飾って毎日話しかけ、最期の頃は早くお迎えに来て下さいと祈っていました。氣丈で完璧主義だった母は、家ではいつも気を張りつめた厳しい表情をしていましたが、小咲園では日常の責務からも離れ、温かく親身な介護を日夜受ける恵まれた日々の中で、次第に穏やかな表情になりました。その間、両脚の大腿骨折を経て、昨年白寿祝の際には足に大けがもしましたが、それでも今年の新年は英国の子や孫家族も集合して皆で祝膳を囲み、亡くなる一週間前には、うちの孫やひ孫とも面会し、ウニやイクラやプリンに舌鼓をうち、笑顔で皆に別れを告げました。

インフルエンザやコロナの影響で、面会も限られる中、息子である院長が嘱託医で週二回会えたことはとても幸せだったと思います。葬儀もコロナによる緊急事態で、私達家族のみの静かな送りになりましたが、母は子や孫世代の安泰も見届け、葬儀もクリニクに障りない日程で全て終えられたことに、母の私達への思いと氣遣いを感じました。今改めて父と母の人生を想うと、父は深みと静けさのある水墨画で、母は力強い極彩色の油絵のような気がしています。

